

招請講演1

「仏教と医療—癒しの哲学」

池口 恵観（注1）（烏帽子山最福寺）

古来、仏教に医学の分野があったことは、つとに知られている。釈迦（注2）在世の頃、祇園精舎には多数の信者がインド全土から集まり、その中に病人や妊婦、死に瀕した者がいたがために、一般治療の『聖人病院』や終末医療の『涅槃堂』などが存在したと伝えられる。仏教の経典『梵網経』に医療の基本思想が詳しく記され、他の経典からも内科から外科、産婦人科と、今日の総合病院にある医療（放射線科など現代医療は除く）はすべてあったことが分かる。特異なのは、性的行為の方法から社会的意義まで、今で言う性教育が医療に入っていたことが経典で分かっている。性的行為が豊饒の吉祥を表すインドのヒンズー教に沿うものであったのと、性に悩む青少年を正しく導く目的もあったと推測される。また、朝鮮半島や日本で流行った薬師如来信仰でもその存在が窺われる。奈良興福寺には、『施薬院』があり、薬草園も完備していた。そしていつの時代からかは不明だが、少なくとも奈良時代には医療を専門とする医僧が現れ、漢方医とともに治療に当たっていた。

真言密教の開祖弘法大師空海（注3）は、留学先の唐から帰朝する時、数々の経典に混じって医学書を持ち帰った。いかなる経典かは不明だが、留学僧によって数々の文物が大陸から運ばれて奈良朝文化が形成されたが、平安朝になっても変わることなく、最新医学も例外ではない。そして空海は、「靈障を含む前世の因縁による病は加持祈祷で、怪我とか暴飲暴食などによる自己が作りだした病気や流行病は施薬をもってする」ように分け、「先天的な病は不治」としていたようである。その根底にあるのは、密教の神秘性にあり、「救いたいと願う行者が大日如来の法力をその心に受け、救われたいと真剣に願う患者の心に注ぎ込むことによって功德が顕れる」としている。各種の行法を検討するに、今日的には免疫の賦活が考えられるが、人間に潜む能力の無限を想像させ、免疫自体に靈性が潜在するとも考えられる。今日、神と人間を結ぶヨーガを医療に加えるべきか否かの問題はあろうが、明らかに健康法としても医療に取り入れても良からう。

近年、WHO（世界保健機構）の健康の定義に、『健康とは、ただ単に病気ではないことを指すのではない。肉体的、精神的、社会的、靈性的に安定している状態を言う』とあるように、『靈性的』が加えられたことは、自然界には、物質的存在のみならず、人間の心に湧き起こった観念の一とりわけ気高い観念の一領域に属するものを容認せざるを得なかったものであろう。現代医療は、投薬、手術、放射線などに集約され、ともすれば患者に内在する抵抗力の増進、生命力の導引が軽視される傾きがある。複雑不可解な人体を正常にするには、総合的な取り組みが必要であらう。

注1 池口恵観。高野山大学文学部密教学科卒。医学博士。高野山真言宗伝灯大阿闍梨、山口大学、広島大学、金沢大学、岡山大学、弘前大学、大分医科大、久留米大学、大阪大学など医学部非常勤講師。

注2 釈迦は、前四八六年、八〇歳で入滅。異説あり。

注3 空海（七七四～八三五）は八〇四年に入唐し、八〇六年に帰朝。